

論文

高等女学校の美育からみる「少女」と化粧の関係

小 出 治都子*

[序章]

論者はこれまで、近代の婦人と化粧の関係について考察してきた。そして、博士予備論文で、近代の婦人と化粧の関係には、雑誌・化粧品会社・美容家という3つの要素が必要であり、この3要素は相互関係をもっていたことを論じた¹。

こうした婦人と化粧の関係については、先行研究でも度々論じられている。その研究方法は多様であり、通史的に化粧を論じた江馬務²や村澤博人³、化粧品会社の動向から化粧文化を論じた石田かおり⁴の研究がある。また、現代の化粧を中心に論じたのは、米澤泉⁵である。さらに、化粧文化研究を学際的研究と位置づけ、歴史学のみならず心理学の立場から論じた平松隆円⁶のような研究もある。

これらの化粧文化研究では、婦人よりも年齢が下の女性——いわゆる「少女」と呼ばれる存在——の化粧についてはほとんど論じられてこなかった。その理由として、「少女」と化粧の関係が表出するようになったのは1990年代であるとされ⁷、それまで「少女」と化粧の関係が明らかにされることがあまりなかったためと考えられる。

だが、近年、キッズコスメが売られるなど、化粧の対象年齢は低年齢化しており、「少女」と化粧の関係を論じることは、女性と化粧の関係を論じるための基盤研究となり、化粧文化研究において必要なことである。

そのため、本稿では歴史学の観点から近代の「少女」と化粧の關係に着目し、とくに、大正期の女学生と化粧の關係を考察する。この時期を考察対象にした理由は、1899（明治32）年の高等女学校令の施行以降、高等女学校に入学する女学生の数が増えた時期であることが挙げられる⁸。次に、女学生を考察対象とした理由は、女学生を指して「少女」と考えられているからである。「少女」について、今田絵里香は、「女学校に通い、少女雑誌を買い与えられていた女子に限定される。（中略）なぜなら経済的に余裕があること、親が教育熱心であること、少女雑誌のような都市文化に肯定的であること、この三つの条件が揃っていることが必要不可欠であったからである」⁹と論じ、渡部周子は、「少女」期について、「就学期にあって、出産可能な身体を持ちつつも結婚まで猶予された期間」¹⁰と論じている。また、本田和子は、女学生を「少女幻想共同体」とし、彼女ら特有の文化である女学生文化について論じている¹¹。「少女幻想共同体」とは、「女学生にのみ共有可能な」¹²集団のことであり、「彼女ら占有の治外法権的文化圏の濫觴」¹³の場であった。

このように、「少女」である女学生は、限られた数の存在でありながら、独自の文化をもった存在であった。この「少女」たちの生活について論じているのが、黒岩比佐子¹⁴と川村邦光¹⁵である。川村は雑誌の化粧品広告に「少女」が描かれていたことに着目し、「少女」と化粧について、「化粧は、たとえ女学校では禁止されようとも、少なくとも都市部に住む若い女性にとって、日常茶飯事のこととなっていった」¹⁶と考察し、「東京の女学生や令嬢が流行の最先端を疾走しているというイメージ」¹⁷への憧れから、化粧品を購入するように雑誌広告などでおおられていたことを論じている。

上記したように、『オトメの祈り』には、「少女」が化粧をしていた事実が書かれている。しかし、具体的にどのような化粧方法でどのような化粧をしていたかは論じられていない。石田の研究にも、「昭和に入る頃までの女学校では、化粧をしなくて学校に行く生徒は女性としての身だしなみを欠く不道徳な者とされていた」¹⁸という記述がある。しかし、その具体的な資料は提示されていないため、その真偽を確かめることが必要である。

キーワード：美育、高等女学校、化粧

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 表象領域

真偽を確かめるにあたり、重視すべきものが高等女学校における美育概念である。美育とは、「感性と理性の両面をふくむ人間性そのものの育成を意味する」¹⁹ものである。「本来的にはシラー的な意味における人間教育を意味」している美育概念は、明治30年代にその概念を論じられるようになったものである。この美育概念が女学生と化粧の関係にどのように関わっていたかを考察する。

そこで、本稿では次のような構成で論を進める。

まず、大正期の女学生と化粧について、どのような関係にあったのかを探ることから始める。具体的には、当時の女学生が愛読していた『少女の友』や同時代の雑誌の化粧関連の記事を分析し、誰がどのような内容の記事を書いていたかを論じる。さらに、当時の高等女学校の実態について着目する。そして、美育概念が「少女」と化粧の関係にどのような影響を与えたかを考察する。

[第一章]

1912（大正元）年9月、『少女の友』に次のような記事がある。

お化粧をなさるには、十四五歳までは水おしろいをお使ひなさい。普通のおしろいは餘り目立っていきません。石鹸を使ってすぐおしろいをおつけになるとまだらはげになります。石鹸の後に糠でもってお顔をお撫でなさい。さうしてからおしろいをつけると誠につきがよろしうございます²⁰

「少女と身だしなみ」と題されたこの記事を書いたのは、東京高等女学校（現・東京女子学園）の校長である棚橋絢子（1839-1939）である²¹。

この棚橋の記述から、14、15歳の「少女」が化粧をしていることが読み取れる。14、15歳ということは、この「少女」が女学生（または、それに準じた年齢）であることがわかる。この記述の化粧の仕方を見てみると、①石鹸で洗顔（顔の汚れを落とす）、②糠で顔を撫でる（保湿のためと思われる）、③水おしろいをつける、という3段階を踏んでいる。棚橋が、普通のおしろいではなく、水おしろいを推奨している理由は、水おしろいとその名のとおり、おしろいを水で溶いて使用するためである。水で溶くため、薄化粧をすることができる水おしろいは、棚橋の記事の前年、1910（明治43）年ごろから販売されている²²。

このように、水おしろいを使って薄く化粧を施すことについては、教育者も認めていたようである。

それに対し、化粧の害や失敗について論じているのが、1914（大正2）年7月の『少女の友』に、東京女子高等師範学校訓導の堀七蔵が書いた記事である。

…お化粧では、黒い顔は白く、ソバカスは見えないやうにといふ考へで施すものであるから、先づ手軽なお化になる方法であります。しかし茲にお話しますのはこれとは違つて、至つておそろしい熊に、可愛いお嬢さんが化けたといふ話であります。

…熊になるお化粧を殊更した譯ではないが白粉をつけた後にお湯に入つたからかゝるお化となつたのであります。それは使つた白粉に鉛が入つてゐるからであります。

…わが少女諸君にして、もしお化粧する人があるならば宜しく無鉛白粉を使ふやうにせらるゝことを希望いたします。²³

堀は、鉛を含んだ化粧品を使ったことによる害と失敗を例に取り上げ、化粧をする注意事項として、「少女諸君」に無鉛白粉を選ぶように述べている。この記述の中でも、「もしお化粧する人があるならば」という仮定を立てつつも、「少女」が化粧をすることを前提として述べた文章であるといえる。

さらに、1916（大正4）年10月には、実践女学校長の下田歌子の「女の身だしなみ」と題された記事が掲載された。

白粉をつけるならば無鉛の物を選び、皮膚はよく××洗つてつけるのです。小鼻や眉毛や生え際に固まつたり、

彼方此方に斑があつたりするのは見苦しいものです。そして成るべく女學生は薄りお塗りなさい。²⁴（論者註：くり返しは×で表記した。）

ここでも、棚橋や堀と同様に、洗顔をすること、無鉛白粉を選ぶこと、そして薄化粧にすることを述べている。

しかし、下田は1917（大正5）年4月の「精神の美と容貌の美」に、化粧に対して否定的な論を展開している²⁵。下田は、この記事の中で、「段々妙齢にならうとする少女や、既に妙齢になつた少女」が、「容貌の美醜を氣にして」しまうのは仕方ないこととしている。しかし、そのために紅白粉を塗ることは一時的なことでしかなく、それよりも「身體を健康にする」ことを重視すべきと述べている。さらに、下田はもう一つ重要なこととして、精神を「清く正しく眞正」にすることを挙げている。そして、記事の最後に、「賢い者は精神美を愛敬し、賢くない者は容貌美を愛翫いたします」と結んでいる。

この記述からは、容貌美、つまり顔を美しくすることについて否定的であることがわかる。さらに、化粧は顔を美しくするものである、という認識をもっていたことも読み取れる。これは、1916（大正4）年4月の「女の身だしなみ」として化粧を挙げていることと反している。「女の身だしなみ」とあるように、この中では化粧は身だしなみの一つとして考えられている。しかし、「精神の美と容貌の美」の中では、化粧は一時的に顔を美しくするものと考えられており、化粧の意義が身だしなみから美しくなるためのもの、というように変化しているのである。

このように、下田はわずか1年で化粧に対する考えを肯定的から否定的なものへと変化させた。しかし、『少女の友』は商業雑誌であり、化粧品会社の広告も多く掲載されている。そのため、『少女の友』の中では、化粧を肯定的に捉えるような考え方をしていた可能性もある。そこで、下田の化粧に対する考えを、下田の著書から探ることとする。

1910（明治43）年、下田歌子は『婦人常識の養成』を刊行した。その中で、身だしなみと虚飾について、以下のよう書かれている。

身嗜みは、自分を美しく見せると云ふ考へよりも、高尚に端正に見られて、他人に失禮に當らぬ様になると云ふ考へがあらまほしいので御座います。艷麗、濃美といふよりも、高潔、清楚と云ふ方が、即ち身嗜みの極意であらうと存じます。

所が、虚飾となりますと、身分をも忘れ、年齢をも忘れて、無暗に派手な、若い風をして見たり、非常に美しい衣物や帯を着けて見たり、金銀珠玉の飾り物に高價な金を拂つても、猶飽き足らぬとなるもので御座います。²⁶

このように、下田は身だしなみと虚飾の違いについて詳説している。さらに、「婦人として一通りの身だしなみは是非とも爲なければならぬ」²⁷とも論じている。さらに、下田は身だしなみを適度な装飾と述べ、如何なるものであるかを論じている。その中で、「健康な身躰」と「精神の美、人格の美」について述べている²⁸。「健康にして圓滿に發達した身躰」を「眞の美」と呼び、「奥床しい尊い、清い、なつかしい觀念」を相手に抱かせる人を「第一の美人」としてしている。この身体美と精神美を得るために必要なこととして、下田は美的教育（後、美育と称す）を取り上げている。

美育とは、前述したように、「感性と理性の両面をふくむ人間性そのものの育成を意味する」ものである。下田は、「能く美育の眞理を解するを得れば、高尚なる氣韻を養ひ、優雅なる風采を加へ、所謂、天爵的、紳士貴婦人たるの資格を、自づから具備せしむるに至る」²⁹と論じ、美育の重要性を指摘している。

下田と同じように、美育を重視した教育家が三輪田眞佐子である。三輪田は、著書『女子教育要言』の中で、体育との関係を重視しながら美育について論じている³⁰。また、三輪田は、1900（明治33）年に教育啓蒙誌系の雑誌『女鑑』において「女品論」という記事を3回にわたって書いた。その中で、男性が女性を評するさいに先ず外貌の美醜で判断することを例に上げ、そのため、「化粧をつとむるは、多數婦人の習」³¹であることを述べている。しかし、人を選ぶ標準とすべきものは、「先づ心術の卓抜なるもの、身體の健全なるもの、その次に於て、比較上容貌は、醜よりも、美をとるは可なり。」³²としている。三輪田はとくに、心術、つまり精神美を重視しており、「精神美なれば、これが表出して人品高雅なるべし」³³と説いている。さらに、「外貌は、先天的の美醜なれば如何ともすること能はざるも、人品は、後天的の美醜なれば、美となるも、醜となるも、自ら撰ぶを得るなり」³⁴とし、化粧による身体

美ではなく、精神美の重要性を論じている。この身体美と精神美の関係は、下田が論じた美育と類似している。ただし、下田は、身だしなみとしての化粧は容認しており、それによる身体美を否定していない。それに対し、三輪田は、化粧による身体美を否定しており、ここに両者の化粧に対する考え方の差異を見ることができる。それは、三輪田が化粧について、「白粉を施すは、一般の風習なれど、こは、皮膚を害し、衣襟を穢す恐あれば、少量に用ふべし。これを大量に用ふるは、反りて、浅まじと見劣りせらるゝものなめり。」³⁵とし、一般の風習としながらも、化粧をすることに対して消極的な意見を述べていることから理解できよう。

下田と三輪田の化粧に対する考えの差異は、両者が設立した高等女学校の教育内容にも反映されている。そこで、次章以降、下田と三輪田が実際行った教育内容について美育を中心に考察する。

[第二章]

本章では、下田歌子が1899（明治32）年に設立した実践女学校の教育内容から、美育について考察する。下田は美育概念を得るための教育として、以下のようなものを挙げている。

女子が幼少の頃より、學ぶべきは、その常識を養ふべき、普通の學科にして、其れより漸次、嫁娶の齡にも近づかば、裁縫の業、料理の術は、殊に心を入れて習ひ覺ゆべし。次に、插花、茶の湯、音樂（ピアノ、オルガン、風琴、バイオリン等の、高雅なるもの）なども、美育の助けとして、一亘り心得置くべし、又、詠歌も、女子が品性を高雅ならしむるには、極めて宜しかるべければ、暇あらん折は試みしめて可なり、されど、前にも云へるが如く、前者は、女子が正課として、必ず學ばしむべきもの、後者は副課として、若し學ぶ餘地あらば、學ばしむべしと云ふなり。³⁶

ここから、美育概念に基づいて作られた教科は、裁縫、料理、音楽など、「嫁娶の齡」に近づいた「少女」が学ぶものが多い。また、前述したように、美育は体育との関係が重視されている。そのため、体操も美育概念に基づいた教科の一つといえる。そして、美育概念と直接結び付いた教科として、図画を挙げることができる。実践女学校の「実践女学校學則」（1911年）に記されているこれらの教科を取り上げると、以下のようなになる。なお、教科のあとに毎週時数を書いており、その時間数は特に記載がない限り、全学年同じ時数となっている。

図画（一）、家事（第三学年まではなし、第四学年から二）、裁縫（六）、音楽（一）、体操（三）、手芸（一）³⁷

次に、『学制百年史』で書かれている、美育概念に基づいた教科の時間数を見てみる。

1899（明治32）年に「高等女学校ノ学科及其程度ニ関スル規則」が制定された中から、美育に概念に基づいた教科だけを以下に取り出した。なお、時数に関しては、前述した条件のもとで記載している。

図画（一）、家事（第二学年までなし、第三学年から二）、裁縫（四）、音楽（二）、体操（三）、手芸（なし）³⁸

ただし、『学制百年史』に記載されている修業年限は四年制のものであり、実践女学校のように五ヵ年制の学校と少し差異が見受けられる。

ここで、実践女学校の教科の時間数と比較すると、「高等女学校ノ学科及其程度ニ関スル規則」に比べ、音楽の時間数以外はすべて同じ時間数、または規則よりも多く時間数をとっている。『学制百年史』において、高等女学校における国語、裁縫、音楽、修身等の科目を重視していたことが書かれている³⁹が、実践女学校においても、これらの科目が重視されていたことが理解できる。

この下田の教育理念には、1893（明治26）年から2年間ほどヨーロッパに留学した経験が培われている。下田はこの留学で、「遠くヨーロッパからアジアを見たこと、とりわけ、アジアの中の日本をみる事ができたこと」⁴⁰が大きな収穫であったようだ。そのため、1898（明治31）年に発足した帝国婦人協会は、「中流以上の女子に対ひて云々

するものにあらず」、むしろ「下層婦人の徳を高め智を進める」こととし、国家発展の基礎たる女性の育成を目的とした⁴¹。その実践の一つが、実践女学校開設である。そのため、その教育内容に関しても、将来の婦人として国家の発展に携わるためのものと見るのできるのである。

[第三章]

次に、三輪田眞佐子が設立した三輪田高等女学校において、美育概念に基づいた教科がどのようなものであったかを考察する。

三輪田眞佐子は、1902（明治35）年に三輪田女学校を創立した。この女学校における美育に関する教育内容は、以下のとおりである。

図画（第三学年まで一、第四学年から二）、家事（第三学年までなし、第四学年は二、第五学年は四）、裁縫（五）、音楽（二）、体操（二）、習字（第三学年まで二、第四学年から一）⁴²

さらに、1903（明治36）年には三輪田高等女学校として認可され、高等女学校のひとつとなった⁴³。そのときに、習字が国語に含まれ、手芸が加わることとなった⁴⁴。これにより、下田の実践女学校と同様の教育が、三輪田高等女学校でも行われていたことがわかる。

前述したように、三輪田は美育と体育の関係を重視していた。三輪田眞佐子の著書『女子教育要言』には、美育と徳育、知育、体育との関係について論じられている。特に、体育と美育の関係を重視し、体育の項目で、女子教育における体操を「躰操は、まのあたり、女子の道止に關係し、従ひて、女徳を害はん恐もあるを以て、一般の父兄は、これを好まず、女生、自も、憚る色あり」⁴⁵と論じながらも、美育の項目では体育との関係を以下のように論じている。

體操は、女子の淑徳を破るものと擯斥するものあれど、その操法の種類、校風の高下、及、教授の目的如何によりては、恐るべき結果あらんも知るべからざれど、苟、適當なる教練を加へんには、こは、體育に必要なもののみかは、女子の姿勢を、端麗ならしむるものとして、美育にも、効能あるべし。故に、於のれは、女子の體操を以て、淑徳を破るものとなさざるのみかは、更に、美育の一端ともなることを望むなり。⁴⁶

このように、三輪田は美育とともに体育を重視していた。その理由は、「体育を奨励して体格上の欠点を無くする」ためである。三輪田の目指す教育は、良妻賢母、徳才兼備、和洋折衷、和魂洋才、体育重視であったとされる⁴⁷。こうした教育を受けることによって、

第一、女徳、智量、品格、及、女藝等を備へ、第二、頭髮、眉毛、眼色、體制、身丈、筋肉、及、姿勢等、各、其の宜しきを得、第三、裝飾は、適度を失はざるものならざるべからず。⁴⁸

とした三つの要素をもった美人ができ、それは、「個人的と社会的との両方が完備して教育の目的が達せられた」⁴⁹ことになると考えられたのである。

[終章]

以上、「少女」と化粧の関係、および美育について分析した。これらを踏まえて、本稿の目的である①「少女」は女学校に行く際に化粧をしていたのか真偽を確かめる、②美育概念は「少女」と化粧の関係にどのような影響を与えたかを考察する。

まず、①「少女」は化粧をして女学校に行っていたのかについてである。結論から述べると、これは真である。

その理由のひとつとして、『少女の友』に掲載された化粧に関する記事の執筆者が、全員教育者であることが挙げ

られる。『少女の友』は商業雑誌であり、化粧品会社の広告が多く掲載されるなど、化粧品との関係も深い雑誌である⁵⁰。その中で、化粧品に対して否定的な態度をとることは難しかった可能性はある。しかし、東京女子高等師範学校の堀七蔵が書いた記事のように、白粉の危険性を書いたものもあるように、すべての記事が化粧品を肯定的に見ていたわけではない。

さらに、これらの記事が掲載された時期も重要である。化粧品関連の記事の時期を取り上げてみると、棚橋絢子の「少女と身だしなみ」は1912（大正元）年9月、堀が書いた「熊になるお化粧品」は1914（大正2）年7月、下田歌子の「女の身だしなみ」は1916（大正4）年10月である。この記事が掲載されたのは、ほとんどが学期の始まる時期である。そのため、女学校へ登校するさいに化粧品をすることへの注意とみることができるのである。

また、下田や三輪田眞佐子は著書の中で、化粧品について論じていることから、実際、化粧品をしていた「少女」がいたと考えるのが妥当であろう。この下田と三輪田の化粧品に対する考え方は、両者の美育に対する考え方が影響していると思われる。下田は、美育によって身体美と精神美を得るべきと考え、そのために身だしなみとしての化粧品を容認し、それによる身体美も認めている。それに対し、三輪田は化粧品による身体美を否定し、体育によって得られる身体美を重視している。

では、両者の美育概念は教育にどのような影響を与えたのであろうか。②美育概念が「少女」と化粧の関係に与えた影響と共に考察する。

前述したように、下田は身だしなみとしての化粧品を容認し、それによって作られる身体美を容認した。ただし、化粧品によって得られる美は一時的なものとし、健康的な身体となることが美であると説いた。この健康的な身体を得るため、そして美しい精神を得るために、下田は美育概念を取り入れた教科の時間数を、国家が規定した「高等女学校ノ学科及其程度ニ関スル規則」の時間数よりも多くした。

三輪田もまた、美育概念を取り入れた教科の時間数を多くしている。その中でも体育を重視していた三輪田は、体育によって身体美を作ることを教育目標のひとつとしていた。

このように、美育概念に基づいた教育がなされることで、「少女」たちは精神美、身体美ともに得なければならぬこととなった。それは、美育によって作り出される、完全な美の存在であるといえよう。渡部周子は、近代日本において、女性は男性を癒すための美の媒介であり、そのために、社会の花としての存在価値を求められたと論じた⁵¹。このような状況の中、「少女」たちは美を得るために、身だしなみとしての化粧品を、美しさを得るための装飾としての化粧品として考えるようになったのではないだろうか。つまり、美育はその目的を達するがために、「少女」と化粧の関係をより密にさせてしまったといえ、美育が「少女」と化粧の关系到結果的に直接関係したといえる。

このことを補強するように、ちょうどこの頃、化粧品会社は様々な化粧品を販売しており、さらに、「化粧品＝美しさを得ることができるもの」として、化粧品購買欲を高めようとした化粧品広告を出していた。また、明治末期以降、刊行された礼儀作法について述べた文献には、それまで「夫や舅、姑のための」化粧品と記述されていたものが、「自分の美を發揮するための」化粧品として論じられるようになった⁵²。

以上のことから、美育を直接的な媒介として、「少女」の化粧品は、身だしなみとしてのものから、美しさを得るためのものとされ、近代日本において「少女」と化粧の關係が構築されたのである。

謝辞 本研究を遂行するにあたり、経費を援助いただく財団法人コスメトロジー財団に深謝いたします。

注

- 1 小出治都子「女性美の近代化——化粧品と美容の観点から」立命館大学大学院先端総合学術研究科 2007年度博士予備論文（修士論文相当）
- 2 江馬務『装身と化粧品（江馬務著作集第4巻）』、中央公論社、1988年
- 3 村澤博人『顔の文化誌』講談社学術文庫、2007年
- 4 石田かおり『化粧品と人間—規格化された身体からの脱出』、法政大学出版局、2009年
- 5 米澤泉『コスメの時代：「私遊び」の現代文化論』、勁草書房、2008年
- 6 平松隆円『化粧品にみる日本文化；だれのためによそおうのか？』、水曜社、2009年

- 7 前掲『化粧と人間—規格化された身体からの脱出』、pp.3-5
- 8 香川せつ子・河村貞枝編『叢書・比較教育社会史 女性と高等教育—機会拡張と社会的相克』（昭和堂、2008年、p.216）によれば、1912（大正元）年から1921（大正9）年は、とくに女子の中等教育（高等女学校）入学者が、男子のそれを凌ぐ勢いで増加した年であると述べられている。
- 9 今田絵里香『「少女」の社会史』、勁草書房、2007年、p.5
- 10 渡部周子『〈少女〉像の誕生—近代日本における「少女」規範の形成』、新泉社、2007年、p.12
- 11 本田和子『女学生の系譜 彩色される明治』、青土社、1990年
- 12 同上書、p.179
- 13 同上書、p.179
- 14 黒岩比佐子『明治のお嬢さま』、角川選書、2008年
- 15 川村邦光『オトメの祈り—近代女性イメージの誕生』、紀伊国屋書店、1993年
- 16 同上書、p.151
- 17 同上書、p.165
- 18 前掲『化粧と人間—規格化された身体からの脱出』、p.99
- 19 下中直也『哲学事典』、平凡社、1971年、p.1151
- 20 棚橋絢子「少女と身だしなみ」『少女の友』、実業之日本社、1912年9月、pp.19-20
- 21 棚橋は、華族女学校で教鞭をふるうなど、華族の子弟の教育をなした。また、1903（明治36）年、東京高等女学校を設立した人物である。（唐澤富太郎『女子学生の歴史』、木耳社、1979年、pp.294-295）
- 22 1910（明治43）年にはレート水白粉が、翌1911（明治44）年にはクラブ水白粉が発売されている。
- 23 堀七蔵「熊になるお化粧」『少女の友』、実業之日本社、1914年7月、pp.52-53
- 24 下田歌子「女の身だしなみ」『少女の友』、実業之日本社、1916年10月、pp.54-55
- 25 下田歌子「精神の美と容貌の美」『少女の友』、実業之日本社、1917年4月、pp.56-57
- 26 下田歌子『婦人常識の養成』、実業之日本社、1910年、pp.272-273
- 27 同上書、p.274
- 28 同上書、pp.285-287
- 29 下田歌子『家庭教育 泰西所見』、博文館、1901年、p.246
- 30 三輪田眞佐子『女子教育要言』、国光社、1897年、p.127
- 31 三輪田眞佐子「女品論（天）」『女鑑』、国光社、1900年、p.3
- 32 同上書、p.3
- 33 三輪田眞佐子「女品論（地）」『女鑑』、国光社、1900年、p.5
- 34 同上書、p.5
- 35 前掲『女子教育要言』、pp.107-108
- 36 下田歌子『女子のつとめ』、成美堂、1902年、p.43
- 37 実践女子学園八十年史編纂委員会編『実践女子学園八十年史』、p.137
- 38 文部省編『学制百年史』。1972年、p.358
- 39 同上書、p.359
- 40 前掲『実践女子学園八十年史』、p.43
- 41 同上書、p.59
- 42 三輪田眞佐子『三輪田眞佐子』、日本図書センター、2005年、p.138
- 43 はじめは五年制一〇学級、生徒数約五〇〇名であったが、一九一三（大正二）年には学級数一三学級、生徒数約七〇〇名、さらに一九二三（大正一二）年には、学級数一六学級、生徒数約九三〇名と発展した。（前掲『女子学生の歴史』、p.303）
- 44 前掲『三輪田眞佐子』p.141
- 45 前掲『女子教育要言』、国文社、1897年、p.109
- 46 同上書、p.127
- 47 前掲『女子学生の歴史』p.307
- 48 三輪田眞佐子『女子の本分』、国光社、1894年、p.129
- 49 前掲『女子学生の歴史』、p.305
- 50 拙著『化粧する「少女」—レート化粧品の販売戦略』（『大正イマジユイ』No.4、2008年）において、化粧品会社の広告に女学生が多く描かれていたこと、また、「少女」が化粧品購買者対象とされていたことを確認した。

- 51 前掲『<少女>像の誕生——近代日本における「少女」規範の形成』
- 52 前掲「女性美の近代化——化粧と美容の観点から」立命館大学大学院先端総合学術研究科 2007年度博士予備論文（修士論文相当）

The Relationship between Teenage Girls and Makeup in Japan Viewed from the Perspective of Aesthetic Education in Women's Secondary Schools

KOIDE Chitoko

Abstract:

Makeup for Japanese teenage girls is generally said to have become trendy only in the 1990s. Therefore, it has been thought that there had been little relationship between teenage girls and makeup until then, and, thus, little research has been performed on the topic. This study reconsiders the relationship between teenage girls and makeup, focusing on modern Japan in the 1910s. First, it analyzes articles about applying makeup in *Shojo no tomo*, a magazine which was popular among teenage girls at the time. Second, it examines aesthetic education at women's secondary schools, and how the concept of aesthetic education influenced teenage girls and their applying of makeup. At first, makeup was considered as one way of preparing an appropriate appearance for teenage girls. However, the emphasis on beauty in aesthetic education influenced teenage girls to use makeup not only to prepare an appropriate appearance but to make themselves more beautiful. With the additional pressure of advertising by cosmetic companies, applying makeup came to be seen as equal to achieving beauty. In this way, the relationship between teenage girls and makeup application became established in modern Japan as early as the 1910s.

Keywords: aesthetic education, women's secondary schools, makeup

高等女学校の美育からみる「少女」と化粧の関係

小 出 治都子

要旨：

化粧する「少女」が表出したのは、1990年代のことである。それまで、「少女」と化粧は関係のないものと考えられていたため、その関係について論じた研究はほとんどない。そこで、本稿では近代の「少女」と化粧の関係を対象に考察を試みた。

まず、「少女」が読んでいた『少女の友』に掲載された化粧に関する記事を分析した。次に、「少女」が通っていた高等女学校の教育、その中でも美育に着目し、その概念が「少女」や化粧に与えた影響について論じた。

その結果、「少女」の化粧は、身だしなみの一つとして考えられていたことが判明した。しかし美育によって、美しくあることを求められた「少女」は、美を得るために身だしなみとしての化粧を、美しさを得るためのものとして考えるようになった。さらに、当時の化粧品会社の広告などにより、「化粧 = 美しさを得る」という構図が出来上がった。

このような構図のもと、近代の「少女」と化粧の関係は構築されていたことが明らかとなったのである。

